

## 虹

## アフリカの手触りを

## ①48 在野の研究者は元保育士



ルワンダについての研究書を翻訳する村田さん

赤みを帯びた土の上で女の子がほぼ笑む。その背後には巨木のように大きな女性が立っている。

2018年に日本語訳が出版されたアフリカの絵本『アヤンダ おおきくなりたくなかったおんなのこ』の表紙は、乾いた大地ならではの強烈な光を宿した色彩を映す。読み進めれば、憂いを帯びた不思議な味わいの物語が展開する。戦争で父を亡くした少女が周囲の人を手伝ったり、命を助けたりするうちに家にも入れないほど体が大きくなるという物語。戦争でトラウマを負った子どもを表現した寓話だ。

フランス語の原著は2007年に出版された。西アフリカ・コートジボワールの女性作家、ヴェロニク・タジョさんが物語を書いた。1955年生まれで、詩も小説も書く児童文学作家だ。立山町の村田はるせさん(56)が翻訳を手掛けた。「タジョさんは想像力を喚起することに心をくだく。解決策を安易に論じず、現実を見る手助けをしてくれる」と話す。

19世紀から20世紀初頭にかけて、アフリカのほぼ全域が列強により強引に分割された。不自然な国境は植民地時代に画定された。だから一つの国の中にさまざまな民族や宗教、背景を持った人たちが身を寄せ合う。植民地支配によるゆがみは独立後も色濃く残る。国家統一のためにやむなく旧宗主国の言語を公用語にし、内戦やクーデターは絶えない。

村田さんは在野の研究者として、アフリカに関する文献を翻訳し、富山で勉強会を開く。「日本人がアフリカと聞いてイメージするのは、大自然と紛争くらい。そこで生きている人たちの手触りを伝えたい」

◇

もともとは保育士で、東京の保育園に勤めていた。子どもは好きだったが、30歳を過ぎると仕事にマンネリ感を覚えた。青年海外協力隊に転機を期待した。保育の経験と趣味で学んだフランス語が生かせる。ニジェールという国への派遣が決まった。

初めて聞いた国名だった。フランスが旧宗主国で、地図を見ると海がなかった。国土の8割をサハラ砂漠が占める。図書館でニジェールの本を探したが見当たらなかった。仕方なくアフリカの旅行記を読んだ。

1995年にニジェールに派遣された。トラブルは絶えなかった。マラリアに感染した。

雇ったガードマンは頻繁に有給休暇を取った。クーデターが起こり、勤務先の近くで銃声を聞いた。

現地の保育園での仕事は面白かった。日本の子どもは大人の目を常に意識するが、ニジェールは自由奔放だった。園児からは「タンティ・ハルセ」と呼ばれた。フランス語で「はるせおばさん」という意味だった。

不思議に思ったことがあった。現地で共に働く女性の同僚たちは会議で発言しようとしな。日本の保育士の感覚からすれば、理解できないことだった。

青年海外協力隊の施設の本棚にあったアフリカの小説に触れて分かった気がした。アフリカの女性は、自分の考えを述べる機会を与えられていない。離婚も言い出せない。他国の女性以上に抑圧されていた。個人の意思決定の背景に文化や歴史が積み重



「映日果」 広田郁世

なっている。手に取った本が教えてくれた。個人の心情と社会的な痛みの複雑な絡み合いを伝えるアフリカ文学の魅力を知った。

◇

2年間の滞在を終えて、日本に戻った。青年海外協力隊関係の集まりで知り合った富山出身の男性との結婚を機に立山町に移り住んだ。アフリカ文学への関心は尽きず、35歳で富山大に社会人入学した。

アフリカ学会で出会った映画監督にタジョさんという存在を覚えてもらった。アフリカでは90年代に旧宗主国からの「輸入」に頼らず、日常と伝統に根差した児童文学を、現地で出版する動きが活発になった。その先頭にいるのがタジョさんだった。

本を手にとると、短い言葉の中に重層的な表現が溶け込んでいる。それが歴史と手

をつないでいる。検索してみても情報はほとんどないが、偶然メールアドレスを見つけた。そこに感想と質問を送った。するとタジョさんから丁寧な返事が届いた。

タジョさんとの出会いを契機にコートジボワールやセネガルに渡り、絵本を集めた。日本人の感覚にはない鮮烈な色彩や、自由な線に魅了された。卒業論文のテーマにアフリカの児童文学を選んだ。

卒業を控え「ここで終わるのは中途半端」と思った。東京外語大の大学院に進んだ。博士論文が認定された時には47歳になっていた。その後、大学教員の公募に挑戦したが、指導経験も若さもない村田さんには狭き門だった。アフリカ関係のNGOに採用されたが、家族を介護することになり、結局働けなかった。

やりがい求め、富山市内のデッサン教

室に通った。ある日、教室でアフリカ人のアーティストの絵画が紹介された。作品中にフランス語で書かれた言葉があり、村田さんが解説した。それをきっかけに教室を主宰する樋口裕重子さん(49)が村田さんの来歴を知り、アフリカに関する地域文化論の講座を富山で開くよう勧めてくれた。

アフリカの絵本を紹介し、文化や女性をめぐる状況について講義する。村田さんは学んだことを還元できるのがうれしかった。発言をあえて控えて、受講生の意見を引き出す。その方がアフリカをより身近に感じてもらえる気がした。講座に出席する樋口さんは「想像力が刺激される。自分もアフリカの誰かとつながっている気になる」と話す。

村田さんはタジョさんと交流を続けなが

ら、その作品を研究した。タジョさんは「彼女の質問に答えるうちに私たちは友達になった」と言う。

日本でもアフリカを描いた絵本はあるが、アフリカ人以外の手によるものがほとんどだった。善意に満ちた内容でも、独自の歴史や感覚からは遠い。タジョさんの本を日本に送り出す意義はある。いくつもの出版社に掛け合った。出版にこぎ着けると、タジョさんから「粘り強い努力の成果ですね」と言ってもらえた。その本が『アヤンダ』だった。研究機関に所属しなくても、在野でもやれることはあった。

◇

アフリカの絵本展も日本各地で開いている。大阪の会場に来たのが、京都で出版社を営む岡本千津さん(57)。村田さんの言葉から他の人にはない知識やアフリカへの愛着を感じた。岡本さんは「この人を離してはいけない」と思った。

94年にアフリカ中部のルワンダであった大量虐殺を題材にしたタジョさんの小説『神(イマーナ)の影』の翻訳を依頼した。突然の暴力に混乱する人たちの心模様を表現するフランス語の文章は難解だった。村田さんは「絵画を翻訳しているようだった」と振り返る。タジョさんと何度もやり取りし、日本語に仕立てた。2019年に刊行した。岡本さんは「決して売れるタイプの本ではないけれど、読んでくれた人は良い本だと言ってくれる」と手応えを語る。

アフリカは日本から遠い。でも、おやつで口にするチョコレートも、パソコンに欠かせないレアメタルもアフリカから輸出される。それらをめぐって争いや搾取が起こる。アフリカの苦境と日本はつながっている。「人の意見を変えられなくても、一緒に考えることはできる。私にできることは議論する材料を出し続けること」

村田さんは今、ルワンダに関する研究書を翻訳している。亡命ルワンダ人に聞き取りしたカナダ人ジャーナリストによる著書だ。出版のあてはないが、毎日パソコンに向かっている。伝えるべきことがまだある。

アフリカの国々にどんな文化や慣習があるか、知らない人も多いでしょう。一方で、人口は急増。30年後には世界人口の4分の1を占めるそうです。忘れてはならないのが、人類発祥の地でもあること。そこに複雑な歴史が積み重なって現在に至ります。アフリカを知ることは世界の今、そして過去と未来を知ることであります。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社営業局



## 「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は9月1日(水)です。